華麗なる
江戸城大奥の世界

―仕事と生活―

東京大学史料編纂所教授
山　本　博　文

東京都立中央図書館特別文庫室所蔵
「千代田の大奥　お召かへ」（一部）

『将軍と大奥　江戸城の「事件と暮らし」』山本博文著 小学館 2007.7

3 巨大空間江戸城御殿

弘化度江戸城御本丸大広間上段之間模型　個人蔵

上御鈴廊下
御小座敷
御休息之間
能舞台
御座之間
竹之廊下
黒書院
中庭
御錠口
中奥
御三家部屋
白書院
松之廊下
口奥
中庭
表
大広間
台所
中門
御駕篭台
下部屋
下部屋
納戸口
玄関
中之口
御長屋御門

御小座敷
御座之間
天守台
御仏間
呉服之間
千鳥之間
大奥
下御鈴廊下
長局
三之側
二之側
一之側
御広座敷
表御膳所
玄関
七つ口
御広敷門

二の丸

表　儀式を行なう広間や諸役人の執務室がある。

中奥　将軍がふだん生活する部屋がある。

大奥　将軍と御台所の部屋のほか、大奥女中の執務部屋と宿舎があった。

将軍と御台所

朝の総触（御小座敷）

御台様、御年寄四人、中年寄一人、御中臈頭一人、御中臈六、七人

他の一般女中たちは御鈴廊下に平伏して挨拶

その後、将軍と御台所は、御仏間で先祖を拝む

八ツに御成（将軍は着流し）

「その時は御緩りと奥に御在になるのでございます」

「折に触れると日に二度とか一度とか、松の御殿へいらっしゃる時は、向こうから前触に御次がまいりまして、御成と言ってまいります。そうすると、こちらでちゃんと御仕度をしているのでございます」

夜の総触（五ツ）

「今日は大奥だというと、夕方から御沙汰がございます」

将軍は、大奥に泊まらない日は、夜の総触の後中奥に帰る。

そういう日は、カルタや香合、茶事、和歌などで遊ぶ。稀には検校を呼んで琴を奏でさせたり、狂言師を呼んで楽しむ。

大奥は将軍家の家族の役所

男子役人

老中：表の政治責任者

留守居：大奥の管理責任者

御台様御用人：大奥の経済向きの責任者

御広敷番の頭・御広敷添番・伊賀者

- 「大奥にはちょうど御表に男子がそれぞれの職務を執っているが如く、婦人を以てそれぞれの職を充たして何御用にも差し支えなく、従って猥りに男子の立入るを許さないが、もし公用あって貴賤となく、大奥へ立ち入らねばならぬことがあれば、またここに、これを按検する役がある。それは男子が勤めるので、その役所は御広敷と称える所に設けてある」（「時の御太鼓」柴田宵曲『幕末の武家』）
- 現在で言えば、宮内庁のような役所

上級女中（一生奉公）

上臈御年寄
小上臈
御年寄（老女）
御客会釈
中年寄
御中臈
御小姓
御錠口

中級女中

御表使
御右筆
御切手書
御次
呉服之間
御坊主
御広座敷
御三之間

大奥の下級女中

御末頭　きね（町人）、ひら

御末頭格使番頭　こな（名主）、さつ、まな（御徒）

御仲居　唐影、枝折、浮橋、園桜

御仲居介　あやめ、染歌

火之番　屋しま、橋立、青柳、・・・・　18人

火之番格使番　滝路、八重桐

使番　妻木、梅かえ、とまや、藤波（八王子千人同心）・・・・・12人

御半下　まこも、関屋、さつ木、八重桜、かつら木、柏木、明石、桐壷

・・・・・　35人

＊御末頭以下は、御家人、町人、名主、百姓が混在

御末の仕事

- 「御末は上の御駕籠を舁いたり、召上がり物の水仕業などをするから、卑賤の身分のように思われるが、しかし御直参の下班であって、今なら宮内省の判任官である。官給の室に住み、相当の禄を食み、五菜といわれる下男を使い、また部屋者、一にたもんと称する女中をも使っている万更でもない身分・・・」(「時の御太鼓」柴田宵曲『幕末の武家』)
- 「なおくわしく言えば、御膳所用の水汲みをするのではあるものの、同僚が五十人もあるから、さまで労もない。御風呂用の水は、御上の分だけは、平川口外御春屋にある名水を、毎朝黒鍬の者が御広敷まで荷い来て御下男(しもおとこ)に渡し、それを大奥へ運び入れるのである。このほかには御代参に随行し、御台所を初め姫君、または諸家御簾中が御登城入りの節、御広敷から御三の間まで御乗物を舁き入れる。平常は大奥に勤務し、水仕業、煮物、小料理はもちろん、所々の点灯、または重い女中の命に応じ、庶務に従事する。尤も女手に出来ないことがある時は、御広敷に願い出、御下男を手伝わせる。その時は御広敷番衆が立会い、監督する。(同前)

大奥女中の給金

御年寄　　50石・10人扶持　合力金　80両

2600万円＋10人扶持

表使　　8石・3人扶持、合力金30両

600万円＋3人扶持

御祐筆・呉服の間　7石・3人扶持、合力金　20両

400万円＋3人扶持

御末　4石・1人扶持、合力金2両

＊延享元年（1744）　30年以上勤続の女中へ年金

男子禁制の大奥の例外

医師

女中が病気の時は、広敷番の頭の立ち会いで長局に行き診察

御台様らの診察が終わると、御殿内の庭を見学

9歳までの男子

留守居

歳暮の際は留守居らを胴上げ

「こよひ松ノ殿へよろこび申奉る御留守居の人々とここの司の人々とを、御胴上とてはなばなしき御祝事あり。・・・あまたの女房數しらず侍らふに、御使番の女ども、「たち給へ」と言えば、いふまにいふまに立つに、前後へよりいとあまたとりかかり、・・・」(『井関隆子日記』)

御年寄の勤務と昇進

御年寄の執務室——千鳥の間

「煙草盆を控えてちっとも動きませぬ。そこへいろいろな事を申し込むと、一々裁判をするのでございます」『旧事諮問録』

「一引き、二運、三女」

滝山（小納戸大岡忠右衛門の姉）

御錠口→御客会釈→御年寄

村山ませ子（大岡忠右衛門の娘）

滝山の部屋子→御台様付き御中臈

大奥御年寄大崎の権力

大崎は、先だって治済から、御側御用取次として田沼派の牙城となっていた横田準松を除くことはできないかと尋ねられ、「此度ハ甚だ六ケ敷、私手際ニは参りかね候」と答えたが、「今日参り候ニ付き、内々申し聞け候」とさらに新しい状況を話している。

また、横田の加増の事情について、次のように言う。

「筑後守（横田準松）御加増之義ハ、初発伺之節五千石と相清み候、老女共より申し出、先三千石ニ而も然るべく候、又進って兎も角もと上江も御内々は申し上げ、其筋江も申し談じ候上、三千石ニ相成り候事」

大崎は、松平定信が老中に就任して大奥に挨拶に来たとき、「以来ハ御同役」と語りかけ、定信に「老中ニ向ヒ、同役トハ何事ゾ」と叱りつけられ、大奥を去った（海保青陵の『経済話』）

大奥上臈御年寄姉小路の権力

水戸藩主徳川斉昭が姉小路を招いた時の返答

「駒込様（斉昭）より姉（姉小路）へ御文通御座候よし、其訳は、是非面談致し申したき儀これ有り候間、一寸手透きもこれ有り候はば、参り候様御申し越しに相成り候処、姉御挨拶申し上げ候様には、此節如何にも御用繁多にて、寸暇も離れ兼ね申し候、何ぞ御用も御座候はば、御書取にても仰せ付けられ候様申し上げ候由」

「姉の極魂意（懇意）に致し候公方様（将軍）御右筆これ有り。此人は至って悪馬にて、気を見て持ち込み申さず候ては、一とはねにやられ申し候。偖し此人にこれなく候ては、姉の腹は分かりかね、且つ此人次第と申す事に候得ば、是非是へ説を容れ候手段目論置き申し候」

幕臣下曽根金三郎が、「姉の小路へ御手が付候の何だのといふ事は、乞食迄申様にて、扨々困ります」と申された。

（水戸藩士高橋多一郎『遠近橋』）

大奥女中の気位の高さ

此度一ツ橋大奥え芝大奥より御通路相初り候付、去ル九月廿一日より女使御差出被成候ニ付、右御挨拶旁一ツ橋よりも、老女飯島為御使同月廿九日芝え罷越候処、茂姫様飯島え御逢被成候節、中座等者有之候得共、直ニ御側近く御間内え入、御目見致し、**惣而手高成振廻**、無憚儀共、御不敬成致方、御案外之事ニ思召候。其節　薩摩守様・虎寿丸様・お敬様・御内証之御方、御引続御一席ニ而御逢被成候処、右ニ相准し、**弥甚手高成義ニ而**、御不敬至極之振廻、御不礼甚事ニ思召候。其以後於御茶屋ニ御饗応之節も、薩摩守様御出被成、御自身御馳走、御手自御酌等迄被成、御もてなし被成候処、**何之御会釈も不仕**、御床前上座ニ着座仕罷在、其砌、茂姫様ニも被為入、御馳走被遊候所、右之節も**着座相改不申、少々身を振り候迄ニ而**、聊憚候気色も無之、御不敬至極、言語同断之事ニ思召候。茂姫様え奉対、右之通之振廻ニ御座候得者、薩摩守様・御子様方え者猶更之儀、御内証之御方初、老女中平野抔え之応答等之儀は、**誠ニ部屋方者同然之取扱ニ有之**、惣而御内証之御方其外老女中以下之女中、高下無差別同様之あしらい、是又一向ニ不相分、不相応之取扱、失礼目立候而、御不興千万ニ思召候。

御中臈の地位

大岡ませ子の談話

「お手付きの御中臈を召し出す時には、御用掛（老女の筆頭）と相談して御年寄がきめるのです。きまりますと世話親を拵えます。世話親になるのは、御客会釈（同役両三人あり）か、御錠口（四人ないし六人の同役あり）です。御中臈の席次は御客会釈の下、御錠口の上なのですけれども、御錠口を上へ立てるのが例になっていました」

家斉死後のお美代の方への次の申し渡し（『三田村鳶魚全集』第1巻）。

「文恭院様（家斉）御在世中、年来出精相勤め候に付き、上臈年寄上座に仰せ付けられ、御充行上臈年寄並に増し下され、別段御手当金三百両充下され候」

御中臈の出産

「内宮（大奥のこと）のことは申すも何かがなれど、感仰せし旨あれば云う也。或御医師の語りしは、上（将軍のこと）の御中老（臈）〔これは公の御妾を称するなり〕方妊身に成らるると、其御中老方の容体を候に御医師出れば、御中臈上座に居り、閾を隔てて御医師下座より診脈す。これは胎中の御子様を貴ぶゆえ也。因て御出産あれば、御医師上座よりして、御中臈は下座に在て脈を候しむと。後又一斉に談ずること有て云云せし語中に、云ふ。某が婦は、始め大奥の表使を勤めたる者なるが、右の如く、御中老方妊身に成らるると、其掛り有りて、殊更に其人に奉侍することなり。畢竟これは胎中の御子を敬するゆえとぞ。因て其御中老出産せらるると、掛の婦御生子を懐抱して、其設ある御部屋に入れ参らせ、尋で奉侍怠らず。これより産婦は平人として捨て顧ざれば、其御中老、己の仕ふ婦女ども集めて看侍すと。右の如く其始終を異にすること、是予が感仰する所以也」（『甲子夜話』）

東京都立中央図書館特別文庫室所蔵「奥奉公出世双六」

部屋方（又者）

御年寄

　つぼね1人　合の間（側）6人　仲居3人　タモン4人

御中臈

　つぼね1人　合の間2人　小僧1人　タモン2人

「長廊下は、御下男が雑巾掛けはするものの、往来する女中の中には、下駄穿きのままで歩く者もあるから、縁は汚れている。だから部屋に出入りするには、身分にもよるが、御部屋者と称えた召使いを、二人位つれて歩く。これは草履取なので、御縁を歩く草履と、御廊下を歩く草履を替えるためである。御末の如きでさえも御部屋者を一人は連れる。・・・御三の間でもたもんすなわち御部屋者を三人、へや、おつぼね、相の間と、こう三人使う。御末も一人のたもんは使う」（「時の御太鼓」柴田宵曲『幕末の武家』）

帯をねだる吉野みちの手紙

「人のやうにむへき（無益）ニ遣すてなぞハ致し申さず、みな／＼のこり候しなニ御座候。私事、御かげ様ニて一度も病気ニても下り候御事もなく、御奉公大切ニ致し御つとめ折候事、何とぞ／＼さやう思召遊し候て、右之金子くれ／＼も御願い申し上げ候。みな／＼かみのさし物も十両、十五両など出し候しなを、宿（実家）ニてとゝのひもらひ候へ共、私事ハ御まえ様の御くろう様遊し候所存じ折り候事、きるい（着類）戴き候代りニこうがひ（笄）・かんざし戴き候事、先此ほうハ御くろう様かけまじく候。いつ迄も此やうニてハ御座なく、人なみに揃候と又々りやうけん致し、其時ハ夏冬の御仕きせ物金子ニていただき、あなた様へ上まいらせ候つもりニ心がけ折り候、・・・かへす／＼御くろう様遊ばし候所、存じおり候事、ま事ニ／＼申しかね折候へ共、致しかたなくぜひなく御願い申し上げまいらせ候。此上等ハ、御願い申し候ても御断り遊ばし下され候」

一生奉公か
暇をもらって結婚かを悩む吉野みち

「もはや当年もとしかわり候間、私身分之事、所々ニてうらなひ、御みくじなぞ戴き候所、何かたニてもいつしやう(一生)御奉公がよろしくと出候事、ぜひ／＼いつしやう御奉公致し度と存じ候間、此段御ともじ様ニ御そうだんのうへ御返事戴き度、もはや御部屋ニ十一年もつとめおり候間、只今迄のやうニわけもなく勤め候ても余り／＼つらくと存じ候事、御いつしやうニ候得ハ、其心得ニて勤めまいらせ候。もはや年も三十のうへニも相成り候事、せつ角いなかへ参り候ても何も出来申さず、こまり候はと存じ候事。何分、此所御ききつぎみ下されたく、ひとへニ／＼御願い申し上げ候。御返事次第ニて旦那様へも願い出しまいらせ候」

大奥女中のスキャンダル

絵島事件：正徳4年（1714）2月2日

「当月二日朝、御城女中江島（絵島）、宮地（宮路）と申す両人、其外中老かけ候て九人、下女共に五十人計、増上寺へ参詣に事寄、木挽町芝居へ参り桟敷かり候て、野郎生島新五郎と申隠もなき美男と申候、其外野郎四五人桟敷へよび寄せ酒宴に及候由、其事相知れ候て、急速に御詮議有之、（中略）右江島、宮地共に月光院様付の女中にて此度御詮議厳急成様子に候。是は月光院様御下知、又は間部（詮房、側用人）殿より出申と推量仕候。是にて御城奥方の御作法少直り可申と申候。常憲院様（綱吉）御代以来、段々不作法に罷成候時分も此類の事有之由、江島と申女中隠れもなきはで者にて御座候。年齢も四十に近き人に候由。是は小身の旗本に一門有之由、宮地は俗姓賤しき人に候由、定て一門もしかと仕たる者は有之間敷候」（室鳩巣『兼山秘策』第二冊）

延命院事件

享和3年（1803）6月6日、谷中延命院住職日道に対する寺社奉行脇坂安董の申し渡し

「右の者儀、一寺之住職たる身分をも顧みず、淫欲を恣にし、源太郎妹きん、又は大奥部屋方下女ころと密通に及び、其外屋形向き相勤め候女両三人へ艶書をおくり、右之下女参詣の節密会をとげ、或はつや（通夜）などと申しなし寺内に宿止致させ、殊にころ懐妊のよし承り堕胎の薬を遣し、惣て破戒無慙之所行にて、其上寺内作事の義、奉行所へ申立候趣と引き違い勝手儘に建直し候事共、重々不届之至に付死罪申付之。」

谷中感応寺事件

天保5年（1834）5月、日蓮宗感応寺の再興決まる（雑司ヶ谷鼠山の安藤対馬守下屋敷二万八千百九十三坪）

天保7年12月、落成（開山：池上本門寺住持日万上人）

天保9年11月、本門寺の執事日詮が住持となる

天保12年6月、老中水野忠邦、感応寺の廃寺を決める

「奥向よりも御代参と称して宮女大勢つねに参詣するゆゑ、住職を初め供僧等申合、各自競争して不義を行ひ、これに好通し、後には増長して、女中互に申合せ、奥向よりして感応寺へ寄進の物也とて、代る／＼長持の中へ入りて錠をおろし、寺へかつぎ込て恣に姦淫を行ふように成しゆゑ、脇坂大人これをあやしみ尤めて、大目附へ沙汰して、ある時その長持を検して生人形の女をあらはしたりという。」大谷木醇堂作『燈前一睡夢』

大岡ませ子の話

- **安政五年、十三歳で大奥に入る。以後、十ケ年奉公**
- **父は御小納戸大岡忠右衛門、伯母は大奥年寄滝山**
- 御本丸に上がる時に、親が拵えてくれた春慶塗の重ね箪笥は、一両二分でした。
- 部屋の勘定は銘々自身にします。私は滝山が一切してくれました。頂戴したお金も一々滝山に渡しました。毎日のお菜の代などは、局に渡しておきます。
- 私は二十一の時（慶応二年）にお暇になりましたが、お手当御合力を辞退して、瓦解の時までお付き申しておりました。
- 上（かみ）はお覚えがよいもので、父が御小納戸を勤めておりましたので、忠右衛門の娘が、などとおからかいなさいました。

桂川甫賢の女てや

- 天保11年、12歳で大奥女中見習いとなり、同年、呉服の間、翌年一位様(11代将軍家斉の正室広大院)の御中臈となる
- 「天保も十五年ごろかと思いますが、御本丸に御類焼のことがございました折、一位様は紅葉山にお立ちのきなられたのち、「花町は無事か、みてまいれ」との御仰せ、叔母はひきかえしお探ししましたが、お局はすでに焼け落ちて、花町さまは影も形もなく、「お見えになりませぬ」と御返事することができずに、叔母は手燭を持ったまま燃えさかる真っ赤な火のなかにかき消すようにはいって行ったその姿をたしかに見とめたという人があったと申します。叔母の侍女二人もまた後を追うて火中の人になったということですが、ちょうどそのころあいだったのでしょうか、桂川の邸では手燭を手に火事装束の叔母の姿が廊下の向こうに見えて、「おや」と思ううちに消えたということでございます。」(今泉みね『名ごりの夢』東洋文庫)
- まてしばし　行いて帰らぬなき霊の　夢の間にだにみせよおもかげ

桂川甫賢『墜涙日録』